

競技人口増加のための高校生意識調査に関する研究

ラグビー専門部

山形県立新庄神室産業高等学校

樽 佳 彦

1 はじめに

2009年7月28日。ラグビー関係者にとって吉報が届いた。「ラグビーワールドカップ2019日本開催決定」である。嬉しい報告の反面、「ある1つの問題」が大きく浮き彫りになるのではないと思われる。それは「競技人口の低下」である。競技人口は1991年度の57,826人をピークに年々減少し、2009年度では26,570人と45.9%も減少している。減少の要因としては、①少子化時代②高校生のスポーツ離れ③サッカー・バスケットボールの人気上昇等が挙げられる。本校も例外ではなく、2008年に現高校に赴任した当時はすでに部員は6名しかおらず、その数少ない部員も年々減少し、現在では3年生0名、2年生1名、1年生1名の合計2名で活動を行っている状況である。ラグビーは3Kスポーツと評されることもあり、しかも1チーム15人要し、少子化時代においては最も影響を受けそうなスポーツである。本校でも昨年からは、3Kのイメージを取り除くため、また、少人数でも負けない選手造りを実践するため数々の工夫を凝らしてきた。具体例として、隣町健康クラブへトレーナー指導のもと筋力トレーニング(全身強化)、屋内遠泳(全身強化)、15km温泉巡りマラソン(持久力強化)、6時間耐久長距離ウォーキング(精神力強化)、柔道部合同練習(上半身、対人強化)、自転車部合同練習(下半身強化)、雪上タイヤ引き(冬季下半身強化)、グランド雪上雪掘り(冬季上半身強化)、そして週末合同練習(組織力強化)である。

勧誘、練習方法を含め少人数でも楽しく強くなる部活を目指し、様々な工夫を凝らしてはいるが、部員確保という結果が残せず現在に至っている。では、何故「今の高校生はラグビーをしないのか」ただその単純ではるが解決困難な問題を分析しようと思い、この研究を行うことにした。

2 研究方法

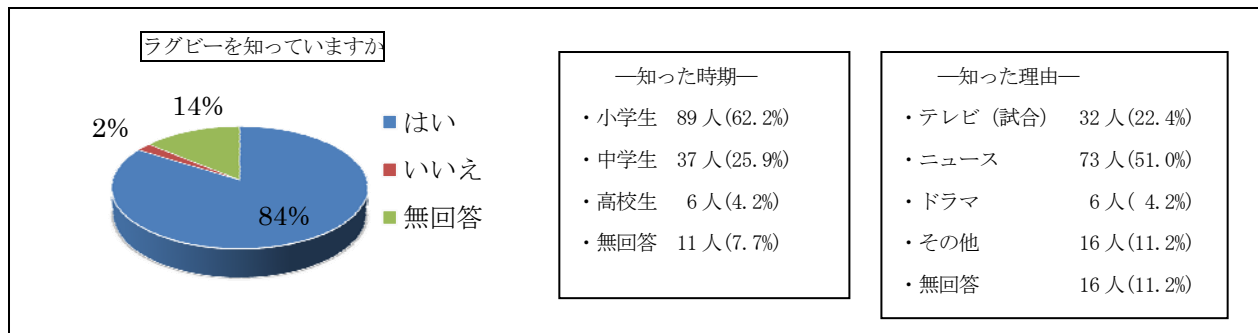
- (1) 調査内容：アンケート
- (2) 調査対象：山形県立新庄神室産業高等学校2学年 143名(男子102名、女子41名)
- (3) 調査期間：平成22年4月
- (4) 以下の記述の設問による

3 結果と考察

- (1) アンケートの結果
生徒を対象にしたアンケートの結果を質問項目毎に整理・分析し、考察を加える。

質問① 「ラグビーを知っていますか。またいつの時期にどのようにして知りましたか。」

本校がある新庄市は大変雪深い地域である。地域の方と話をするとアメリカンフットボールと区別がつかなかったり、1チームのプレーヤーの人数もわからない状況である。生徒が高校に入学しないのは、ラグビーのスポーツ自体を知らないのではという疑問から、確認の意味を含めてアンケート実施した。実施結果は**グラフ①**の通りである。

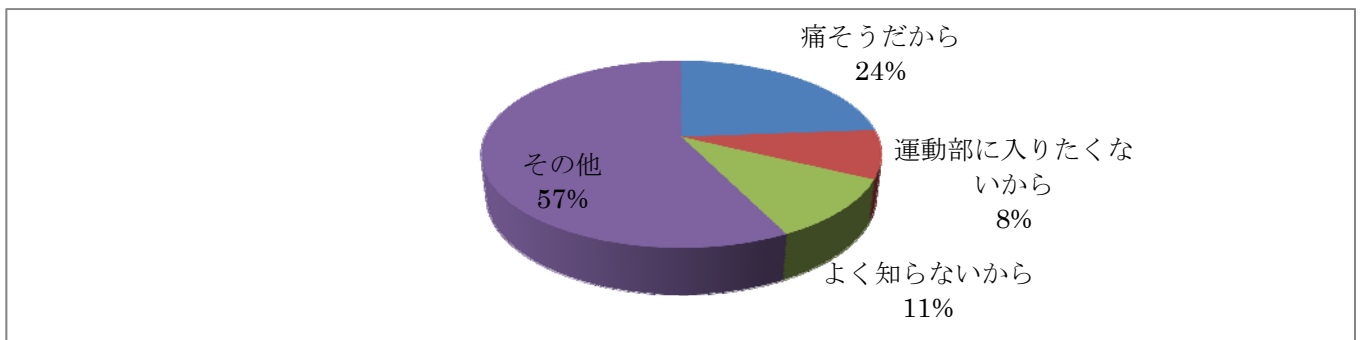


—グラフ①—

上記アンケート結果より、根本的にラグビーという競技を知らない生徒はいないことがわかる。ところが興味深い結果として、小学生時代にほぼ競技を知りえているものの、知った理由がニュースが大半であったということである。この事は、民放でラグビーの試合をいかに放映していないことがわかるとともに、以前、放映された「スクール☆ウォーズ」のようなドラマを生徒達は目にしていないことが明らかになった。

では、ラグビー競技は小学生の早期段階で知りえているものの、何故、山形県でラグビー部が存在する高校が数少ない中で本校ラグビー部に入部しなかったのかをアンケートすることとした。

質問② 「何故ラグビー部に入部しないのですか」(グラフ②参照)



—グラフ②—

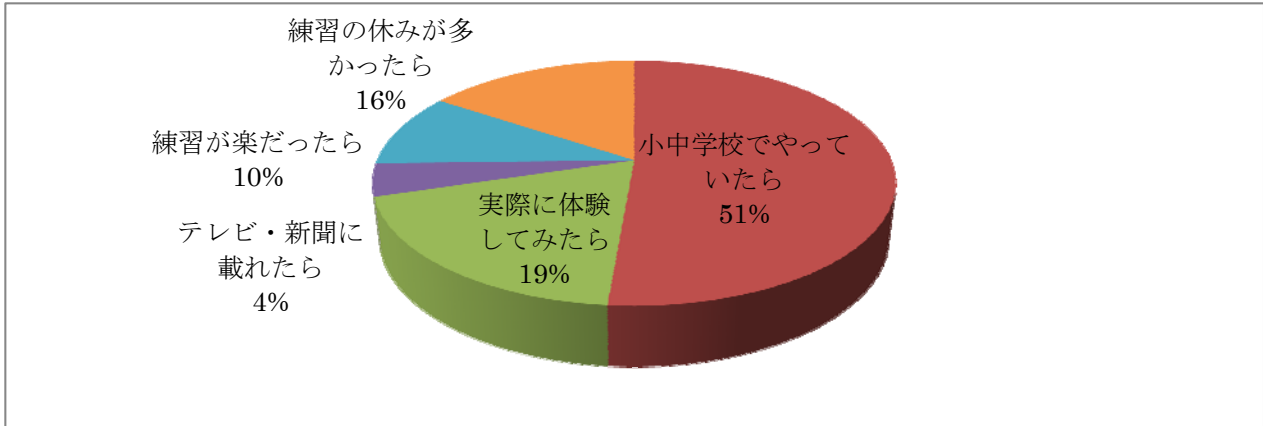
上記質問の背景として、「高校生のスポーツ離れ」「3K」の keywords がどこまで影響しているのかを知る根本的な質問でもある。

アンケート集計前の結果予想としては、「3K」の要因である、「キツイ」「危険」が大半を占めると予想されたが結果としては、痛そうだから(24%)と全体のおよそ1/4にしか及ばなかった。「高校生のスポーツ離れ」においては運動部に入りたくない(8%)と驚くほど少ない結果は意外であった。気になるその他57%だが、詳細としては、①中学校時代に他の運動をしていたから②他の部活動に知っている先輩がいたからが主な理由であった。

上記結果より、当初予想していた「痛そうだから」(24%)は決して少ない人数ではないが、入部しない決定的な理由にはならないことがわかる。また、一般的には高校生が運動部に入部していない印象に関しても運動がしたくないからという理由でもないことがわかる。結果、今の高校生が考えていることとして、新たに挑戦しようとする意識の薄さと、初めて高校生活を送るうえで先輩・後輩のつながり(人間関係)が重要であることがわかる。このことは、本校ラグビー部における、部員が集まらない原因の1つではないかと感じる。「部員の少なさ」=「先輩の少なさ」が悪循環を及ぼし部員が集まらない要因の1つであることがわかった。

質問③ 「どうしたらラグビー部に入部していましたか」(グラフ③参照)

ラグビーは小学生の頃から知っているのに入部を決意しない。その1つの要因が質問②で明らかになった訳だが、では、どのような状況だったらラグビー部に入部するのか問いかけてみた。



—グラフ③—

上記結果より、小中学校でやっていたら（51%）と山形県全体のラグビーに対する組織力の弱さが完全に浮き彫りとなる結果であった。現在では小学校の体育の授業でタグラグビーを取り入れる動きも出ているがまだまだラグビーをする環境は整っていない様子がわかる。最北地区では、小学生対象にタグラグビーのスクールも行われているが、中学校で一切ラグビーをする環境がなくなってしまうことで他の部活動に所属してしまい本校でラグビーをするまでの関係は築けていない。中学校でラグビーをする環境がない。つまりこれこそが上記結果の「中学校でやっていたら」の部分で大きく影響していることがわかる。最北地区のラグビー部一顧問の願いとしては、中学校教員にラグビー指導者を増員し、部活動として下から盛り上げることだが、現状では不可能だろう。

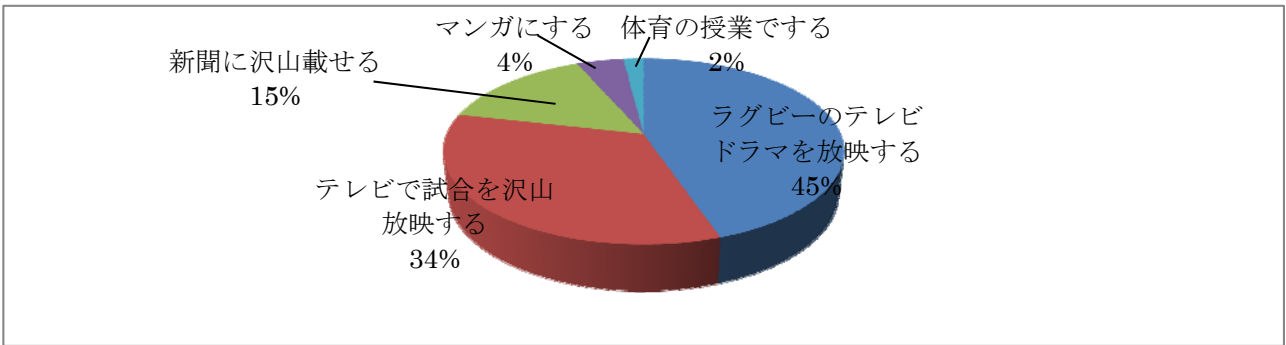
また、気になる結果としては「テレビ・新聞に載れたら」（4%）とあまりに有名意識・目的意識が無いことに驚いた。硬式野球なら甲子園。サッカーなら国立競技場。高校生活3年間かけて部活動に励みそれぞれの聖地を目指すことが青春であり部活動をする目的だと考えていた。ところが、一生懸命頑張って目的を達成するというよりは、「練習が楽だったら」（10%）「練習の休みが多かったら」（16%）計26%と今回アンケートを実施した1/4以上の生徒が目的達成よりは辛い思いをしてまでやらなくてよいという結果の現れではないかと思われる。

しかし、これはある意味、現代子と言われる世代の訴えではないかともとれる。通常、日本では中学校、高校と同じ部活動を3年間ほとんど休まず練習しているのが現状である。海外各国を見た場合、英米などではシーズンごとに違うスポーツをしたり、欧米諸国やオーストラリア、ニュージーランドなどでは学校の部活動ではなく地域のクラブチームが盛んで中にはプロ選手になりえる技術をもつ選手もいるらしい。当たり前と思ってやっていたことが当たり前ではなく、指導者として考え方、発想を180度変えなければならない時代になっているのかもしれないと考えさせられる結果となった。

質問④ 「どうしたらラグビーに興味・関心が湧きますか」

質問③の結果として、小中学校でその運動をしていたら（部活動に所属していたら）が入部するための条件として過半数を超えたことは明らかになった。しかし、高校から始まる部活動はラグビー部だけでは無い。ハンドボール部・ボクシング部なども高校から始まる部活動の一つではないだろうか。

では、何故それら部活動が成り立っているのか（部員が集まっているのか）に焦点を合わせ、ラグビー部に入部するためにはどうしたら興味・関心が湧くのか解決するためアンケートを実施した。（グラフ④参照）



—グラフ④—

上記結果より明らかに今の生徒達に影響を与えるものは「テレビ」であることがわかる。現代の生徒達は活字離れと言われることも多々あるが、そのことに対する結果がグラフからも読み取れる。「ラグビーのテレビドラマを放映する。」(45%)「テレビで試合を沢山放映する。」(34%) テレビ関係から興味・関心が湧くものに関しては実に 79%と圧倒的である。現実には、テレビが影響を与えたスポーツとしては、バスケットボールでは『スラムダンク』(1990~1996

年 週刊少年ジャンプに連載後テレビ放映) サッカーでは『キャプテン翼』(1981~1988 年 週刊少年ジャンプ連載後テレビ放映) その後、Jリーグ発足(1992年)ドーハの悲劇(1993年)と、すでにこの頃にはサッカーの知名度および競技人口は確実なものとしている。そして今年行われた FIFA ワールドカップ 南アフリカ大会では大会前から異常と思えるほど連日早朝から深夜の報道で世間を騒がせた。ハンドボールでは、大崎電気の宮崎大輔選手の活躍でメディアに報道されるようになっている。ボクシングでは、『あしたのジョー』(1968~1973 年 週刊少年マガジン連載後テレビ放映) はじめの一步(1980~週

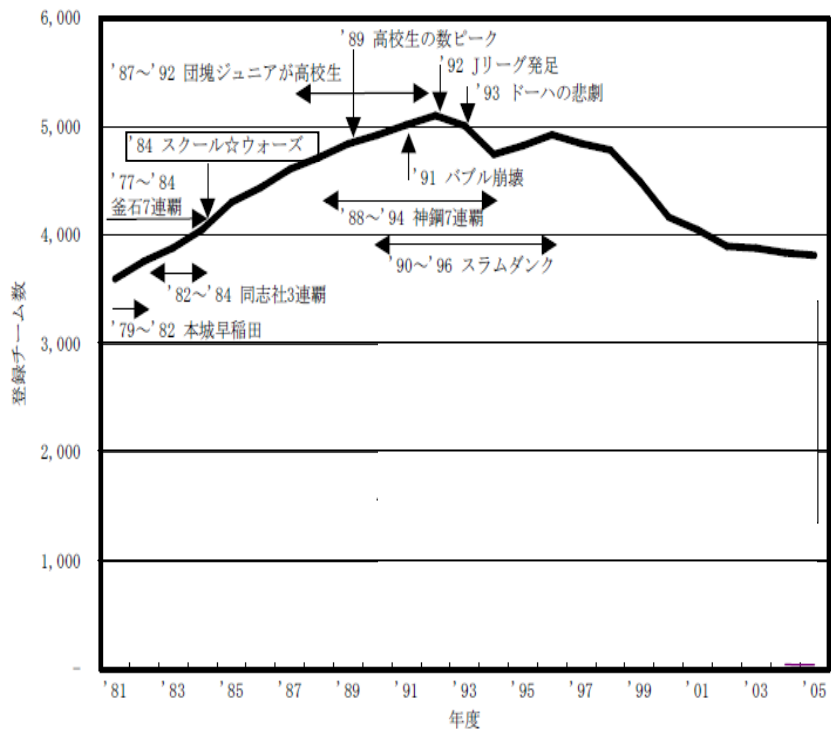


図2 日本協会登録チーム数の推移

—グラフ⑤—

刊少年マガジンで連載中 テレビ放映) ロッキー (1976年アメリカ映画) その他、辰吉丈一郎選手や亀田兄弟など知らない人がいないほどメジャーなスポーツとなっている。

ではメディア関係でラグビーはどうなのだろうか。ラグビーではテレビドラマにおいて、『スクール☆ウォーズ』(1984年10月~1985年4月TBS放送)が有名である。(グラフ⑤参照) スクール☆ウォーズが競技人口増加の全ての要因として当てはまるのかは定かではないがグラフからも少なからず大きく影響を与えていることが大変興味深い結果である。そして、近年ではスクール☆ウォーズのようなドラマが放送されていないことも競技人口の減少に影響があるのではないだろうか。

また、グラフ④から、テレビで試合放送を行う。(34%)も競技人口に大きく影響していることがわかる。例として、全国高等学校ラグビーフットボール大会の放送は2001年度(第81回大会)を最後に主広告主であった住友グループが提供を辞したため、地上波のテレビ放送が激減し一般高校生・中学生の目に熱戦に触れる機会が激減した。年末・年始にNHK等で大学ラグビー等、若干の放送はあるものの、野球、サッカーと比較すれば皆無に等しい。現在の試合放送は衛星放送によるものも大半を占めるが、現実として衛星放送を入れている家庭が少ないことから一般家庭の日常生活で試合を目にする機会は無い。漫画では『アップセット15』といったものもあるが、かつてのスクール☆ウォーズほどの影響は現在まで現れていないようである。

4 まとめ

ラグビーワールドカップ 2019年 日本開催が目前に迫り、現在の競技人口は非常事態宣言を発令する深刻な状態である。強いチームを作るには沢山の人材(人財・人在)が必要である。そして、知名度・人気度の低い競技における部員増加にかけるエネルギーは並々ならぬ努力が必要である。個人レベルで努力をしなければならぬのは当然だが、個人レベルでは厳しい状況を打開できないのも現状もある。今回、アンケート調査により現代高校生における意識調査をしたが、テレビ等のメディアが溢れるこの時代のブームにのるには、メディアによる仕掛けが重要であることがわかる。アンケート中に、「練習が楽だったら」「練習の休みが多かったら」といった無視できない結果があるのも事実だが、それは競技人口が少ないことによる競争意識がない競技自体の弱みが浮き彫りになっている現れなのかもしれない。人は日々、競争の中で生きている。毎日の練習が楽で楽しく過ごせれば試合に負けても悔しいと思わないなんての嘘だ。もし、それが本当ならば、勝つことの楽しさを知らない可哀想な人なのかもしれない。そのような人がもしいたのならば、苦勞して勝ち得る喜びを教えるのがこの教員の仕事だと思う。

今回、取り上げた問題を解決するにはメディアの力がとても重要で、心の底から期待したいところだが現実的には難しい問題が多いのかもしれない。私は何事もバイオリズムのように良い波、悪い波があると信じている。それゆえに、本校赴任した当初6名いた部員もわずか3年目にして2名という切ない状況だが、常に「ここが底だ!!」と言い聞かせ頑張っている。そして、今できることは何かと考えた時に、「部員を増やすこと」は勿論のこと、「今いる部員に少ないからとみじめな思いをさせないこと」と「いつ人が集まっても良い自分自身の準備をすること」だと思っている。ここが我慢だ。頑張り時だ。ここで踏ん張りきれなければどこに行っても通用できない。日々めげる毎日だが今いる生徒のためにもがんばりたい。

最後に、このまとめを通して山形県のみなさんにお礼を書かせてください。

まず、各高校ラグビー部監督さん達にですが、毎週末に各高校さんの練習に混ぜて頂きましてありがとうございます。15人必要とするスポーツで2人の練習には肉体的にも精神的にも技術的にも限界があります。その中で、ゲームに出れるような選手が育ったことは、常日頃から暖かく迎え入れてくれた各高校の監督のおかげです。週末の練習のみならず夏合宿まで参加させていただいたことは選手にとっても指導者にとってもありがたいことです。本当にありがとうございました。

そして本校関係者ですが、わずか2名の部活動でありながら廃部にすることなく存続させていただいてありがとうございます。また、少ない人数ながらにいろいろ工夫をした練習をいれておりますが、ラグビーと全く関係無い部活動まで合同で練習させていただきありがとうございます。

私は埼玉県出身ですが、山形県の教員に採用されて本当によかったです。いつかはこのチームで各高校のチームと戦えるようなチーム造りを目指し今後ともがんばります。ありがとうございました。

《参考文献》

- ・「ラグビー人口について」愛媛県ラグビーフットボール協会